

文 選 雜 識

森 野 繁 夫

「文選集注」百二十卷は、唐代後期に、李善^①を正文とし、それに、李善注および其の他の主な文選注を集成して付したものである。中国では早く散佚したが、幸いにもそれは日本に伝えられ、現在そのうち二十数巻が残っている。その正文は、唐代の李善本文選の姿を伝えていて、板本文選の字句の誤りを訂正することができる点で大きな価値がある。その注は、李善注・文選鈔・文選音決・五臣注・陸善経注が収められており、このうち、文選鈔・文選音決・陸善経注は、「文選集注」によってのみ伝えられているものである。また、李善注・五臣注は、唐代におけるその古い姿を伝えていて、これによって板本文選の李善注・五臣注の誤りを訂正することができる。

いま此の「文選集注」を、今日存在している文選諸本、すなわち正文のみの無注本で我国王朝時代の鈔本（九条本）、李善注本である宋の尤袤刻本、六臣注文選のうち、いわゆる五臣・李善注本である宋の明州本（足利本）、李善・五臣注本である涵芬楼藏宋刊本（四部叢刊本）と校勘し、字句の異同を確かめながら読みすすめている。ここに記した部分は、卷五十九上（板本では卷三十一）雜詩下の一部で、国語科大学院における公説の記録である。

盧諶、字は子諶（二八三—三五〇）西晋末、東晋初の人であり、西晋の末の大乱に洛陽が陥落した際、時に并州刺史であった劉琨をたよって北地に入り、以後、段匹磾・段末波・石季龍・冉閔と、異民族の首領の下に留められ、結局は冉閔の襄國で害に遇った。六十七歳。「晋書」卷四十四に伝がある。この詩は何時頃のものが未詳であるが、北地にあつて晩秋の曠野を望みつつ、胸の思いを述べたものである。

壘壘聞象運	壘 ^び 壘 ^び として圓象は運り
悠悠方儀廓	悠悠として方儀は廓し
忽忽歲云暮	忽忽として歳は云に暮れ
游原采蕭蕭	原に游びて、蕭蕭を采る
北踰茫与河	北は茫と河とを踰え
南臨伊与洛	南は伊と洛とに臨む
凝霜滿蔓草	凝霜は蔓れる草を滿し
悲風振林薄	悲風は林薄を振かす
械械芳華零	械械として芳華は零ち
繁繁芬華落	繁繁として芬華は落つ
下泉激冽清	下泉は冽清を激しくし

曠野増遼索 曠野は遼索を増す

登高眺遐荒 高きに登りて遐荒を眺め

極望無崖際 望めを極むるも崖際無し

形変隨時化 形の変りは時に随いて化り

神感因物作 神の感きは物に因りて作る

澹乎至人心 澹たり至人の心

恬然存玄漠 恬然として玄漠を存す

ゆるやかに天空は連りゆき、はるばると大地は開けている。

いつしか歳も暮れようとし、私は野に出て蕭や霜を摘む。北の

方は茫山や黄河をこえ、南の方は伊水と洛水のはとりまで行った。

深い霜は茂った草を潤おし、悲風は林のしげみをゆり動かしている。

緑色をしていた葉ははらはらと散り、咲き香っていた花はほとほと

と落ちていく。

流れる川は寒々と清んだ水が激し、曠野はもの寂しさを増している。

高みに登って遙かな荒れ野をながめわたしても、目のとどくかぎり

さえぎるものもない。

物の姿の変化は時節のままに移りゆき、心の動きは変化する物の姿

によって引きおこされる。至人の心は安らかであり、虚無の道をおい

だいて心静かであるけれど……

悠悠方儀廓

○各本李善注には「悠悠」の注として「賈逵國語注曰、悠悠、長也、

「廓」の注として「爾雅曰、廓、大也」を引くが、集注本には無い。

集注本には五臣（呂向）注「廓、大也」を引いているから、集注本

が用いた李善注には、少くとも「爾雅」は引用されていないかったと考えられる。

忽忽歲云暮

○各本李善注には「云」の注として、「毛伝」（小雅・何人斯）の

「云、言也」を引く。

北瞻茫与河

○「茫」九条本旁記には「五臣作邙」とある。足利本は「邙」に

作り、「善本作茫字」という校語がある。

凝霜蓄蔓草 悲風振林薄

○李善注：楚辭曰、凝凝霜之紛紛。又曰、哀江介之悲風。

各本李善注は「激」を「激」に作る。今本「楚辭」（九章・悲回風）

では、集注本と同じく「激」となっている。また「哀江介之悲風」

（九章・哀郢）は、今本では「遺風」となっている。

槭槭芳華零

○李善注：徐爰射雉賦注曰、槭、彫柯貞也。

四部本李注では「射雉賦、陳柯槭以改旧。槭、凋柯貞」と、潘岳

「射雉賦」の正文と徐爰の注をあわせ引く。ここでは「射雉賦」の

正文は必要でなく、後人の補足によるものであろう。尤本・足利本

は「已見射雉賦」と引用を略す。

○五臣（呂延濟）注：零、下落也。

紫紫芬華落

○「紫紫」九条本は「紫紫」、足利本は「紫紫」、尤本は「紫紫」に

作る。意味は、李善は「垂世」、鈔は「萎枯也」、五臣（呂延濟）注

は「垂落之貞」と、少しずつづれてゐるが、要するに、花が萎れて落ちるさま。

下泉激冽清

○各本李善注には「冽」の注として「毛萇曰、冽、寒也」が、また「激」の注として「司馬彪莊子注曰、流急、曰激」が引かれてゐるが、集注本李注には無い。鈔は李善注の補足を目的の一つとする文選注であるが、それに「詩伝云、冽、寒貞也」とあるから、原本李善注には「毛伝」は引用されていなかつたはずである。

○五臣（呂向）注：言流泉至於深秋、則急流而清徹也。

足利本・四部本の五臣注では、「深」字を脱す。

極望無崖磔

○今案：音決、崖為涯。

音決本では「崖」が「涯」となつてゐる。意味に変わりはない。なお

「今案」は、集注本編者の案語である。

神感因物作

○各本李善注は「爾雅曰、感、動也」を引く。

○李善注：莊子曰、万物化作、盛衰之殺。

各本の李善注では「莊子曰、万物並作、吾以觀其復」（足利本・

四部本）は「莊子」を「老子」とする）となつており、その次に「王

弼曰、作、生長也。子曰、以虛靜觀其反覆者也」とある。各本の李

善注の引文は「老子」第十六章の正文と王弼の注である。そうして

集注本李善注の「莊子」は天道篇の文で、「万物化作、萌区有状、

盛衰之殺、變化之流也」の略。すなわち各本の李善注は、何らかの

事情で「莊子」の文「万物化作……」が、それとよく似た「老子」

の文「万物並作……」と入れかわり、ついでに、その部分の老子注

が付け加えられたものである。尤本には原注の名残りが「莊子曰」

に残り、足利本は内容から判断して「老子曰」に改めたものと考え

られる。「物の形の變りは時節の變化に隨い、神の感きは物の作

るに因る」という正文の意味から考へても、「老子」の「万物が並

び作れても、私はその根源である道に、それら（万物）が還つてゆ

くことを觀取することができる」というものよりも、「莊子」の「万

物が化んだり作れたりするのは、その萌区においてすでに兆候があ

るが、それは盛衰の次第であり、變化の流れなのである」というも

の方が、引證として適してゐる。なお胡克家の「文選考異」には

「袁本・茶陵本、莊を老に作る。是なり」というが、これは集注本

の李善注を見ないで下した結論であり、正しくない。

澹乎至人心 恬然存玄漠

○李善注：。莊子曰、不離於真、謂之至人。又曰、至人之心若鏡。

又曰、澹而靜乎、漠而清乎。淮南子曰、恬然則縱之。

各本李善注では、「莊子曰」の上に「言已澹乎、同彼至人、意存玄

漠而已」という、正文二句についての釈義があり、「淮南子曰」の

上に「王逸楚辭注曰、儻、安也。儻与澹同」という、「澹」字の説

明がある。また引用されている「莊子」三条の順序も異なつてゐる。

正文の釈義「言うところは已に澹として彼の至人に同じく、意は玄

漠に存するのみ」とは、自分の心が至人のごとくであると解するわけ

であり、李善の解釈とも思われぬ。後人が付加したものである。

○李善注：説文曰、怕、無為也。

各本の李善注は「為」字を脱す。今本「説文」は「怕、無偽也」に作る。「胡氏考異」にはこの異同について、「案するに無の下、当に為字あるべし。各本皆な脱す。子虚賦の注に「怕、無為也」を引く。證とすべし」とあるが、集注本李注には「為」字がある。

○五臣（呂延濟）注：至人真性、澹乎然無所嘗為。唯存玄默。寂寞而已。

足利本、四部本は、「存」を「在」、「默」を「然」に作る。正文「恬然存玄漠」の説明で「存」は言いかえる必要なく、「玄」を「玄默」、「漠」を「寂寞」と言いかえているのであるから、集注本の方が正しかろう。

雜詩 二首

陶淵明

陶淵明（三六五—四二七）は晋宋の交の人で、「晋書」卷九十四、「宋書」卷九十三に伝がある。「雜詩」二首は、彼の「飲酒」二十首の中から、「文選」の撰者、昭明太子が選んだもの「飲酒」二十首の序は次のようなものである。

余は間居して欲び寡く、兼ねて比る夜は已に長し。偶々名酒あり、夕として飲まざる無し。影を顧みて独り尽くし、忽焉として復た酔う。既に酔うの後は、輒ち數句を題けて自ら楽しむ。紙墨は遂て多く、辞に詮次なきも、聊か故人に命みて之を書せしめ、以て欬笑となすのみ。「陶淵明集」卷三

「文選」に選ばれている二首は、淵明の言いわけがましき、あくの強さの感じられる他の十八首と異なり、自然の中にひたる作者の心

境が、のびやかに詠じられていて、読む者の共感をさそう。「文選」編纂に際しての昭明太子の作品選択の基準を示す一例といえよう。

其一

結廬在人境 廬を結んで人境に在り

而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し

問君何能爾 君に問う 何ぞ能く爾ると

心遠地自偏 心遠ければ地は自ら偏る

采菊東籬下 菊を采る東籬の下

悠然望南山 悠然として南山を望む

山氣日夕佳 山氣 日夕に佳く

飛鳥相与還 飛鳥 相い与に還る

此還有真意 此の還りに真の意あり

欲辨已忘言 辨せんと欲するも已に言を忘る

いおりを作つて人里に住んでいる、しかし車馬のざわめきは無い。どうしてそうなのかと人は問う、心が世間から遠ざかっていけば土地も辺鄙になるのだ。

東の垣根のほとりで菊を采り、ゆったりと南山をながめる。山のけ

はいは夕暮が佳く、鳥は連れだつて还つてゆく。

この还りゆく姿にこそ、この世の真実があるが、それを説明しよう

としても説明の言葉忘れてしまふ。

結廬在人境 而無車馬喧

○鈔：在人境者、言与人同者、不得離人。要無、無車馬之喧也。

「人境に在り」とは、人と一緒に生きている者は、人から離れることはできないということである。人とともに生活していても、無を要めていれば、車馬のやかましきなどありはしない。——人の住まない山中などに隱遁するのは不自然であり、自分が人であるからには人々の中で生活すること自然であり、その中で俗塵にまどわされない生き方をすればよいという意味だ、と鈔は説く。この解釈は、後の「飛鳥相与述、此还有真意」——鳥が連れだつてねぐらに还つてゆく、そこにこそこの世の真実がある。——と、鳥は鳥なりに自然に生きてゆくことをよしとする立場に合わせた解である。

問君何能爾 心遠地自偏

○各本李善注は「爾」の注として、「鄭玄礼記注曰、爾、助語也」を引く。この鄭注は「礼記」(檀弓上)の「夫子誨之塚曰、爾母從從爾、爾母扈爾」(爾、從從たる母れ、爾、扈爾たる母れ)の「爾」についてのものであるから、この「何ぞ能く爾る」の「爾」の説明にはならない。おそらく後人の付加したものである。

○五臣(張銑)注：心遠、謂心自幽遠、雖處喧境也、如偏僻也。

足利本・四部本では、「心」「地」二字を脱す。

采菊東籬下 悠然望南山

○「采菊」について、五臣(呂向)注は「菊は香草、黃華、以て酒に泛ぶべし」と、それを采つて酒にうかべるのだという。

○鈔は「淵明の家、東籬の下に菊あり、南山の下に種豆の処あり」というが、淵明は此の時、南山のふもとの豆腐のことを考えていたというのではなく、ついで注。

○「望」字は、淵明の集では「見」に作る。「望」と「見」の異同

について、宋の蘇軾は「東坡題跋」(書譜集改字)の中で次のように言う。「菊を采るの次、偶然に山を見る。初め意を用いず、而して景の意と会す。故に喜ぶべきなり。今、皆な「望南山」に作る。杜子美云う「白鷗没浩蕩、万里誰能馴」(奉贈韋左丞丈)と。蓋し潭波の間に滅没するのみ。而るに宋敏求は余に謂いて曰く、「鷗は没する能わざれば、改めて波字に作る」と。二詩、此の二字を改めて、一篇の神氣の索然たるを覚ゆるなり」と。つまり、南山をわざわざ望みみるのではなく、菊を采つていて、偶然に南山のすがたが目に入ったのであるという。更に此のことについて、宋の呉曾「能改齋漫錄」には次のごとく述べる。「東坡以えらく、淵明の『采菊東籬下、悠然見南山』、識浅き者、見を以て望と為すは、ただに賦賦の美玉とのみにあらずと。然れども余、樂天の『淵明の詩に效う』を觀るに、『時傾一尊酒、坐望東南山』と云う有り。然らば則ち流俗の失。久し。惟だ韋蘇州の『長安の承、裴説に答う』に「采菊露未晞、拳頭見秋山」と云う有り。乃ち真に淵明の詩意を得、而して東坡の説の信すべしと為すを知る」と。

山氣日夕佳

○鈔は「晚に向かえば山氣は清美なり。故に佳と言う」、五臣(李周翰)注は「日暮、山氣は蒙翠す。いわゆる「佳」なり」という。

鈔の言う「清美」とは、清んで美しいことであり、李周翰の「蒙翠」とは、夕もやにかすむことであるから、両者の解は異なる。

飛鳥相与述

○五臣(李周翰)注は、「飛鳥は昼に遊びて、夕に相い与に山林に

婦る。此れ天性を得て自ら任ほしいまにする者なり」と説く。そうして鈔は「鳥を以て喩えと為すなり」と、自分の現在の状態を鳥によって喩えたものと解する。

此还有真意

○李善注：楚辞曰、狐死必首丘。夫人孰能。反其真情。王逸曰、真情、本心也。

今本「楚辞」（七諫、自悲）は「丘」の下に「兮」、「能」の下に「不」字がある。「不反……」であれば「夫れ人孰たれか能く其の真情に反らざらんや」と、意味が変わってくる。

各本李善注は「情」字を脱す。今本「楚辞」王逸注は集注本李注に同じ。つまり李善は「真意」を、「本心なり」——自分の本心と解した。鳥がねぐらに还かへってゆく姿の中に、私の心の底から願ねがっている思いがある、というのである。これに対して鈔は「真とは、道の本を謂いうなり。鳥は日暮れて山に还る。是れ栖かに婦かりて集い、其の勞倦つかれを思おもむ。故に「真意有り」と言うなり」と、天性のままに生なまきている此の鳥の姿、つまり自分の、純朴な村人たちの中で生活している今のくらし方こそ、「道の本」にそったものと淵明は思おもっている、と解する。

○「还」字を、淵明集では「中」に作る。そうであれば、「夕暮に鳥が連れだつて山に还かへつてゆく、この中に……」という意味になり、「鳥がねぐらに还かへつてゆく、このことに……」と、「还る」を特に強める意はなくなる。

欲辨已忘言

○李善注：莊子曰、言者所以在意也。得意而忘言。

「莊子」外物篇の此の言葉の意味は「言は意を伝える手段である。意が伝達されれば忘れさられるものである」というものであるが、斯波六郎博士は、この部分の引證としては知北遊篇の「知という者が、道を知り、道に安んじ、道を身につける方法について狂屈にたずねたところ」狂屈曰く、ああ、予われこれを知れり。將まに若かんじ語らんとすと。言わんと欲するに中りて、其の言わんと欲するところを忘る」というものの方が適切であるとされる。鈔は此の句の意味を「我は今この、理を得るの意を辨せんと欲するも、意以て之を辨せんとするが故に言を忘る」——自分が現在このくらしの中で体得している真理は、説明しようとしてもできない——とする。五臣（李周翰）注は「我、此の真の意を言わんと欲するも、吾も亦た自ら真の意に入る。故に其の言を遺忘して言う無し」——鳥がねぐらに还かへつてゆく、その様子に真の意を感じた作者が、それを説明しようとするが、自分もその中に没入してしまつて説明できなくなつたのだ——と説く。

其二

秋菊有佳色 秋菊に佳色あり
露裒はら其英 露を裒はらいて其の英を撮る
汎此忘憂物 此の忘憂の物に汎あべ
遠我達世情 我が達世の情を遠くす
一觴雖獨進 一觴 独り進むと雖も
杯尽靈自傾 杯おの尽きて靈み自ら傾く
日入群動息 日入りて群動は息み

婦鳥趨林鳴 婦鳥は林に趨きて鳴く

嘯放東軒下 東軒の下に嘯放し

聊復得此生 聊か復た此の生を得たりとす

秋菊が美しく色づいている。私は露にうるおうその花をつむ。この忘憂の酒に汎べて、世をはなれた思いを更に遙かなものにする。杯ひとつ独りで飲んでゐるが、杯の酒は尽き壺もやがて横になる。日も暮れて生き物の動きは息み、ねぐらに帰る鳥が林にむかつて鳴きながら飛んでゆく。

東の窓のほとりで気ままに嘯うそいて、いささか我が生に満足する。

秋菊有佳色 露凝掇其英

○李善注：文字集略曰、露、袞衣香也。然以露盆花、亦謂之露也。各本李善注は「以」字を脱す。「露の、花に盆あつまれるを以て、亦た之を「露」と謂うなり。鈔は「露露」について別の解釈をする。すなわち「露は濕なり。露の尚お衣を濕ぬらす時、往きて其の花を掇取るを言うなり」。李善が「露の露あつまつている、その花をとる」と解するのに対し、鈔は「衣服を露にぬらしながら、その花をとる」のだという。呂延濟は「菊に佳色あり、故に露露に乗じて之を采り、之を酒に泛ぶ」と説明しているから、菊がまだ露にぬれている時にそれをとる、と解したようである。なお集注本の呂延濟注では、「垂」が「垂」字のようにも見える。もし「垂」であれば（「菊に垂たらしし露を垂たらせつつ之を采り……」）ということにならう。

汎此忘憂物 遠我達世情

○「達字」、淵明集は「遣」に作る。「我が、世を遠とほるるの情を遠

くす」。

○李善注：毛詩曰、微我無酒、以遊以遊。毛萇曰、非我無酒、可以忘憂也。

李善は「忘憂物」の注として「毛詩」（北風・柏舟）と、その毛伝を引くが、鈔は更に「魏武帝詩」（短歌行）すなわち「何以解憂、唯有杜康」（何を以て憂いを解かん、唯だ杜康あるのみ）を補引する。

○鈔：達世情者、謂達於世情有為、達駟馳之事。今既忘憂、与世情漸遠。故云 遠我達世情。故其詩云、林園無世情。是也。

「達世情」の意味を、「世情有為に達し、駟馳の事に達するを謂う」と説くから、鈔は「世情に達す」（達は超越の意）と説んだわけである。李善も「纏子」の「董無心曰、無心鄙人也。不識世情」を引證として挙げているから、「世情」と語をまとめたのであろう。しかし呂延濟は「故遠達代上之情、不如我」（故に代上に達するの情を遠くすること、我に如かず）と、「世に達するの情（達世の情）」―世を超越した情―と説んでいるようである。なお鈔に引く淵明の詩は「辛丑の歲、七月、赴飯して江陵に还らんとし、夜塗口を行く」の一句。

一觴雖獨進 杯尽壺自傾

○鈔：獨進、謂不与俗人同傾也。謂其道本若嵇康以酒論道也。「獨進」についての「俗人と、同に傾け尽くさざるを謂うなり」という解釈では、淵明の心があまりに狭くなる。ただ「一人で飲んでゐる」ということでよからう。

○五臣（劉良）注：独酌、独進杯也。又自傾壺而滿也。

劉良は「又た自ら壺を傾けて満たすなり」と、杯の酒が無くなつたら、又た壺を傾けて自分でつぐ、と解する。しかし「杯尽壺自傾」の句は、杯の酒も尽き、壺もやがて空になつて横になる、という意味であらう。

日入群動息 婦鳥趨林鳴

○李善注：莊子、善卷曰、余日出而作、日入而息。尸子曰、昼動而夜息、天之道也。杜育詩曰、臨下覽群動。曹子建贈白馬王詩曰、婦鳥趨喬林。

「日入群動息」の句について、「莊子」「尸子」「杜育詩」が引かれているが、「莊子」（裏玉篇）は、堯に天下を譲ろうと言われた善卷が、それを断る時の言葉で、「尸子」の「昼動きて夜息うは、天の道なり」とともに、この句における淵明の表現だけでなく、こめられている淵明の思想を説明するための引證である。晋の杜育の詩「下に臨みて群動を覽る」は、「羣動」という語の用例を挙げただけのもの。なお杜育の詩は「全晋詩」に未収録。

○五臣（張銑）注：衆物之運動者、日入皆息。

「運」字。足利本・四部本は「羣」に作る。正文「羣動」の説明であるから、「衆物の運動する者」の方がよい。

○陸善経注：李善曰、群動、謂鱗羽等衆物也。

このままであれば、陸善経が「群動」についての李善注を引用したことになるが、李善は「群動」に関しては既に「杜育詩」を引いており、李注としてはそれで十分である。或いは李邕ら後人の補足した李善注に拠つたものかもしれない。

○此の二句は「雜詩」（其二）の「山氣日夕佳、飛鳥相与还」と同

じような内容——鳥がその性のままに行動し生きていること——を言つたものである。

嘯傲東軒下 聊復得此生

○「敖」字。九条本・足利本・四部本・尤本は全て「傲」に作る。しかし足利本校語には「善本作傲字」、九条本旁記にも「一本作傲」とあるので、「傲」となっていた本もあったらしい。集注本所引の鈔には「傲、五誥反」、呂向注には「嘯傲、超逸貞」とあるから、唐代の鈔本、五臣本は、いずれも「傲」であった。

○李善注：郭璞遊仙詩曰、嘯傲遺俗羅。得此生、謂自得於此一生也。劉瓛易注曰、自無出有、曰生。

各本李善注は「謂自得於此一生也」八字が無い。此の八字は正文「得此生」の釈義であり、各本李注では「得此生」という正文の提示だけがなされて、その説明部分は脱落してしまっている。すなわち李善注原本では集注本のごとく、「郭璞遊仙詩に曰う『嘯傲遺俗羅』と、『得此生』とは、此の一生に自得するを謂うなり」とあったものを、後人が李善注に手を加えた際、多分、六臣本を編む時、郭璞の遊仙詩を「嘯傲遺俗、羅得此生」までと誤認し、それ以下の釈義の文を省略してしまつたものである。郭璞の詩は「全晋詩」巻五に収められており、「嘯傲遺俗羅、縱情任独往」（嘯傲して世の羅を遺れ、情を縱にして独往に任ず）というものである。また各本李善注には「劉瓛易注曰、自無出有、曰生」の下に、「生得性之始也」六字が有る。集注本が此の六字を脱したとも考えられるが、「文選」巻六の「魏都賦」——生生之所常厚——の李注に、「劉瓛周易義」（劉瓛易注と同書）が引用されていて、そこには「自無出有曰

生」(無より生を出だすを、生と曰う)とだけあって、「生得性之始也」(生は、性を得るの始めなり)という文は無い。おそらく此の六字は劉瓛易注の文ではなく、後人が付け加えたものであろう。

○五臣(呂向)注：聊復得此生之樂也。

「生」字の上、足利本・四部本は「達」字が有る。これによれば「聊復得此生」を「聊か復た此の達生の樂しみを得たるなり」と解するわけである。「達生」とは「莊子」の言葉で、天理の自然に順い私心を捨てて無為となる、というほどの意味であり、それであれば淵明は既に悟りを得た境地にあることになる。しかし淵明は、そのような達生の境地に自分があるとは恐らく思ったことはなかったであろうし、また此の二句「嘯傲東軒下、聊復得此生」の意味も、今自分の自然の性のままに生きていくことに満足していることを言うようであるから、呂向の注は集注本のごとく「聊か復た此の生の樂しみを得たるなり」とあるのが正しかろう。

○この「聊復得此生」の意味について、李善は「謂自得於此一生也」(此の一生に自得するを謂うなり)つまり、わが生に満足するの意と解する。そして鈔は「聊復得此一生之性也。謂不失本分也」(聊か復た此の一生の性を得たるなり。本分を失わざるを謂うなり)——人としての自分にふさわしい生き方をしているの意と解し、先ほど挙げた呂向は、わが生の樂しみを感得しているの意とするのであり、いずれも李善の解釈とくいちがうものではない。

注

- ① 李善(？—六八九)は唐の高宗の顯慶三年(六五八)に文選注六十卷を著している。以下、その文選を李善本と称する。
- ② 昭和十七年刊「京都帝國大学文学部景印旧鈔本」第三集(第九集)に収められている。
- ③ 李善の注は、文選に使用されている語句の前代における用例を挙げ、客観的な資料によって詩文の語句の意味を証明しようとするものである。しかし、この李善注がわかりにくいため、文章の意味をわかり易く説明する五臣注が作られ、唐の玄宗の開元六年(七一八)に奉られている。五臣とは、呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の五人である。
- ④ 南宋の淳熙八年(一一八一)に、尤袤によって刊行された李善注本で、現在の李善注本完本としては最古のものである。
- ⑤ 六臣本は、五臣本の正文と注を基にして、それに李善注を加え、正文は李善本と対校して字句の異同を記したものである。現在見ることのできる資料(宋彝尊「曝書亭集」卷五二)によれば、最も早い六臣本はいわゆる広都裴氏刻本で、北宋末の政和元年(一一一一)に刻を畢っている。
- ⑥ 最初に編まれた六臣本の注は、五臣注・李善注の順に並んでいる。この種の本で現存最古のものは宋の明州刊本で、足利学校遺蹟図書館に蔵されている。
- ⑦ この本は、単行李善注本、単行五臣注本に本づいたものでなく、五臣・李善注本に拠って、李善と五臣との順序を互いに易えたものに過ぎない。現存する最も古いものとして宋の贛州刊本があるが、ここでは南芬楼藏宋刊本を景印した四部叢刊本によった。